

コミュニティアーカイブ連携のための メタデータスキーマについて

水島久光（東海大学）

椋本輔（学習院大学／鶴見大学）

上松大輝（国立情報学研究所／専修大学）

2020.10.17

デジタルアーカイブ学会第5回研究大会

問いの出発点…ある研究室における「資料」の状況

雑然と集積された「前アーカイブ的資料群」「コレクションの一部」の山



整然と構造化された「デジタルアーカイブ」

ポジティブに考えれば

- ・ オリジナル資料の喪失あるいは損傷をうけたときのバックアップ機能（ダークアーカイブ）
- ・ コミュニティアーカイブ構築と連携のハブ



とりあえず「**目録≒資料をデジタル保存した際のメタデータ**」を考えよう





須賀川町立第一小学校映像
(16mm,1934)

夕張町防空演習
(9.5mm,1934)

2019年6月4日



東日本震災1000日プロジェクト
(2011-2019)

寺前ローカルイメーラボ



大夕張写真展 (2006)

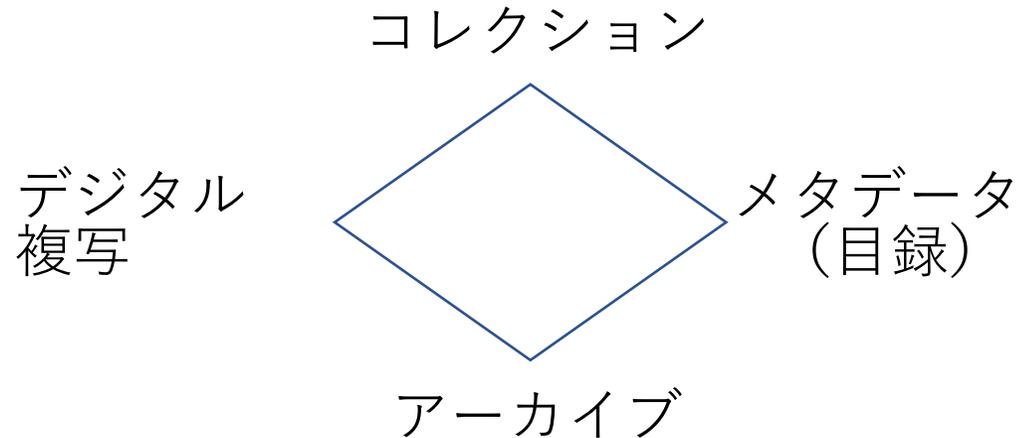


『レンズが見たひらつか』より
S30年代 (2012発行)

もう少し積極的に…全国の実践者の状況にも近い？

実践者の悩み；

手元のコレクション（1～n次資料）群をどうやってデジタルアーカイブの次元に移していくか



所有者が異なるコレクション間の連携を促す

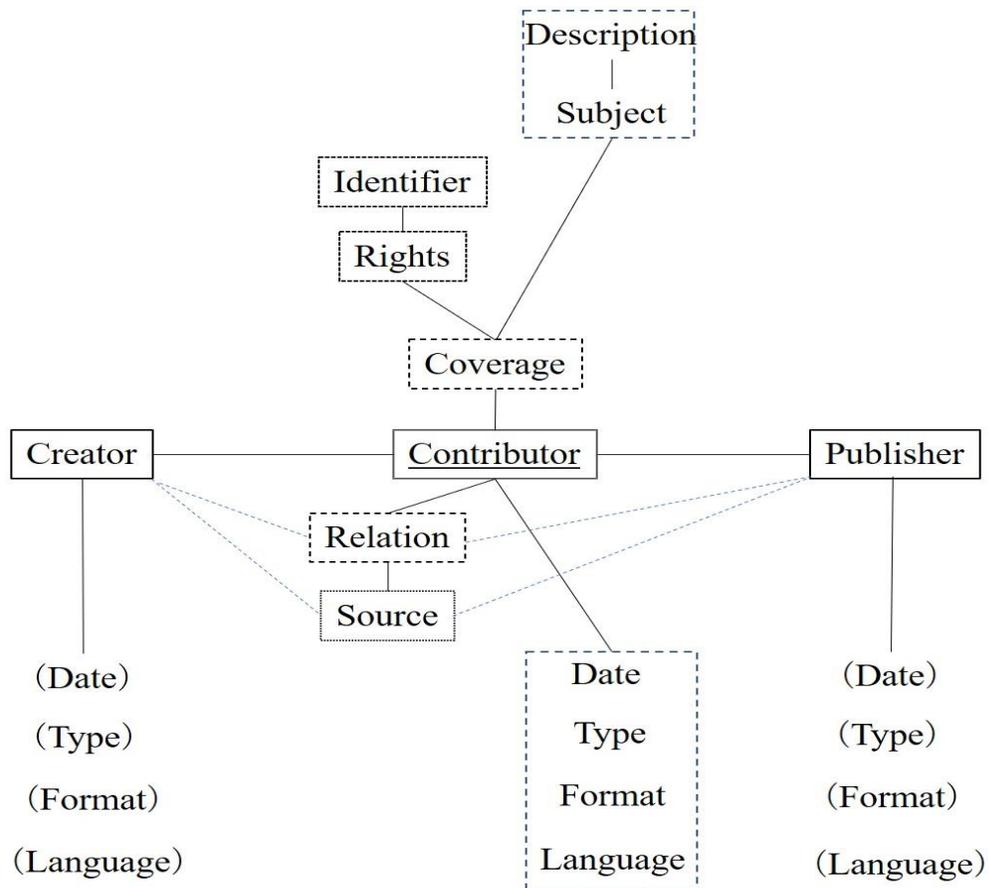
可能な文の構築のシステムを定める言語体系と、口に出された発言（パロール）を受動的に集めるコーパスとのあいだに、アルシーヴは、一つの特殊なレベルを定める。それはすなわち、多数多様の言表を、ことごとく、規則的な出来事として、加工されたり細工されたりする事物として出現させるような、一つの実践のレベルである。

（フーコー『知の考古学』Ⅲ 言表とアルシーヴ V 歴史的アプリオリとアルシーヴ（槇改訳、河出文庫版248、250））

メタデータスキーマの「メディア史」

- メタデータの「スキーマ（概念構造）」の系譜
 - 図書館（情報）学（十進分類法等）
 - ワールド・ワイド・ウェブ（WWW）
 - ⇒ダブリン・コアが代表として語られるようになった背景
- いかに付与していくか
 - トップダウン⇒人間機械複合系⇒自動的な機械処理によるボトムアップ
- トップダウンでも機械的なボトムアップでもなく、デジタルアーカイブをめぐる人々＝コミュニティの関係性に根差した考え方はできないのか？
 - ⇒ダブリン・コアの15項目の見直し

[contributor]への注目



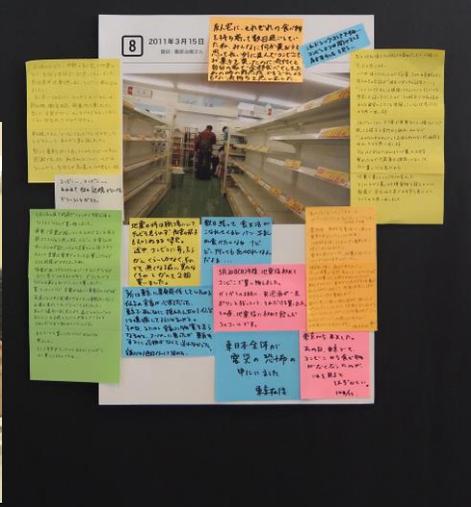
• 「主体」への注目

- アーカイブ実践への寄与（集める、開く、使う（読む・研究する…））
- [coverage]=時空間／意味との関係
- [relation]=他のコレクション／アーカイブとの関係

[contributor]



聞き取り・定点観測



実装・技術的留意点

(メタデータによるコレクション/アーカイブの連携)

- [Contributor]の連携によるURIの間接的定義づけ⇒ 一次資料の存在が浮かび上がる
 - 一次資料をデジタルアーカイブ化可能な場合
 - まだアーカイブされておらず、メタデータが記述されていない場合
 - 現物の複製は存在しないが、メタデータの複製が存在している
- デジタルアーカイブ化されていない資料もこのスキーマで「目録≒メタデータ」をWebに上げることによって相互に参照関係に入る
- ネットワークによる仮想的・潜在的デジタルアーカイブ
 - ⇒一次資料の意味付けがなされ、破棄・喪失の危機を免れる可能性
 - ⇒ハブとなるノードの発見

具体的なプロジェクトへの展開

- SIG：戦争関連資料の保全・継承に関する研究について

- 8月28日～30日、オンライン開催された「空襲・戦災を記録する会第50回全国連絡会議」(<http://kushusensai.net/>)に参加し、全国各地で活動を行う参加者に、アーカイブ化、資料のデジタル化についてヒヤリングを行った。そこから見えてきた課題・・・。
 - 「一般の博物館・公文書館等と異なる収集資料の管理」
 - 「デジタルデータに置き換えられない記憶・体験の扱い」
 - 「寄託・提供された二次資料の扱い」
 - 「証言の公開等に関する問題」
 - 「コンシェルジュ人材の必要性」

